

シンポジウム「レンズが撮らえた文革 —北京 1966 年から 21 世紀中国への視座」について

ソランジュ・ブラン「日本の読者に」

今日の日本の読者に、こうした歴史の隠された部分に接していただけることを幸いに思います。相手がたについての知識を豊かにすることは、不運なめぐりあわせを終わらせるのを援けてくれるからです。本書がその一助となることを願っております。

(『北京 1966』より)

シンポジウム「レンズが撮らえた文革—北京 1966 年から 21 世紀中国への視座」は、2013 年 1 月 27 日 (日)午後 2 時 30 分～6 時すぎまで、専修大学神田校舎 7 号館 3 階 731 教室でおこなわれた。当日の会場で配布したメッセージと発言タイトル・発言者は以下のごとくである。

◆主催者の側から◆

なぜ、このシンポジウムでは、「文化大革命」に目をむけるのでしょうか？ わたしたちがとくに強調したいのは、ここで文化大革命に「目を向ける」というのが、たんなる比喩ではない、ということです。これは、中国全土を揺るがしたばかりか、日本や欧米諸国にも衝撃を与えた、あの歴史的な出来事へと、文字どおり「目を向ける」試みです。というのも、この企画の出発点にあるのは、ソランジュ・ブラン著『北京 1966』という写真集にほかならないからです。その貴重な記録写真を文献史料のように読み解くことによって、もろもろの映像的細部から、まだよく知られていない革命期の実像が浮かび上がってくるのではないかと、そしてそれはまた同時に、今日の中国の原像としても何がしかの意味を持ち、現代の日中問題を支えている巨大な文脈の一環をなしているのではないかと——そのような問題意識から、このシンポジウムでは、同書の編訳者二人にくわえて、現代中国の政治・歴史・文化に関する議論をさらに深めるべく、発表者として矢吹晋氏を、また討議司会として前田年昭氏をそれぞれお迎えします。過去と現在、フランスと日本、イメージとテキスト……、さまざまな領域の交差する運動のただなかで、中国という「隣人」との対話可能性を探ってみたいと思います。

I はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・全体進行司会 鈴木健郎(専修大学准教授・中国宗教学)

II パネラー発表

1) 『北京 1966』あるいは眼差しの邂逅

下澤和義 (専修大学教授・フランス現代思想・表象文化論)

2) 「文革時期に撮られた映像の諸相と文革社会史」

土屋昌明 (専修大学教授・中国思想・文学史)

3) 「私の中国研究における文革・天安門事件・官僚資本主義」

矢吹晋 (横浜市立大学名誉教授・中国研究)

III ディスカッション・・・・・・・・・・討議司会 前田年昭 (神戸芸術工科大学非常勤講師・組版)

このシンポの発表時間は各 40 分、討議は 2 時間に及び、多くの参加者を得て、実り多きシンポジウムとなった。ここに、その発言にもとづいた文章と、その発言ののちにおこなわれた討議の記録を発表する。

なお、本シンポジウムは 2009～2011 年度の専修大学社会科学研究所特別研究助成 (鈴木健郎グループ)「フランスと東アジア諸地域における近現代学芸の共同主観性に関する研究」の成果の一部であることを付言しておく。関係各位および本シンポにご協力くださった方々と学生諸君に感謝の意を表する。

(文責) 主催者 下澤和義・土屋昌明